北九州歴史文化遺産　第五十九回

今見直される
森鷗外と北九州の人と情

北九州市小倉北区鍛冶町の森鷗外旧居。現在は市指定文化財

近代日本文学を象徴するといえば、森鷗外と作品群もその対象であろう。その森鷗外は島根県津和野の出身で、北九州には1899年（明治32年）6月、小倉の第12師団の軍医部長として着任したのが始まり。以降、その地の多彩な人、文化との交わりを互いの成長の一助とした。ここに、その一端を見る。

森鷗外は津和野藩主亀井家の典医・森家の長男で1862年（文久2年）生、本名林太郎。両親の願いに沿って東京医学校（後、東京大医学部）に進み、卒後の1881年（明治14年）陸軍省に入り一貫して軍医の道を歩んだ。

北九州との縁は、1899年（明治32年）6月、前年10月に設置されたばかりの小倉第12師団軍医部長に任じられたのが始まり。鷗外はその前の1887年（明治20年）から4年間、ドイツに官費留学して細菌学を学び、帰国後は赤松登志子と結婚し、「舞姫」「うたかたの記」の執筆など文学活動にも熱をこめていた。

その彼はまたドイツから帰国後の1898年（明治31年）、近衛師団軍医部長兼陸軍軍医学校長に就任して半年余りしか経ていないのに小倉への辞令。「左遷ではないか」と憤り、不平のあまり「陰龍」などの号を用いていた。

鷗外の小倉人事は左遷か？

この小倉への人事をめぐっては、鷗外が台湾総督府軍医部長だった日清戦争当時、台湾を含めて患者数約4万人、死亡者約4000人という脚気が大流行。台湾での責任者であった鷗外にも責任あり。かつ業務に専念せず文筆に熱心な彼を遺憾とする上司が、彼を左遷につなげた、との説がある。鷗外自身、母・峰子あての書簡で「当地にても小生の小倉に来たりしは左遷なりとは軍医一同に申しおりーー」と失意をのぞかせていた。

だが小倉では次第に井上光師団長、山根武壱参謀長らの信任を深くし、公私の友人もでき、この北九州で出会ったのが、玉水俊琥、吉田増蔵（号・学軒）、八頭良一らである。玉水は曹洞宗安国寺住職。1900年（明治33年）11月、俊琥が初めて鷗外を訪れて交流が始まり、玉水は彼に唯識論、鷗外は玉水にドイツ語の哲学入門書を訳読するなどし、その交流は共に大きな智の財産となった。吉田増蔵はみやこ町出身の漢学者。元号「昭和」の考案者。宮内省に仕嘱していた1918年（大正7年）、鷗外と出会い、共に元号について研究。鷗外死去後は彼がその道を担った。

明治32年6月の小倉の第十二師団に赴任を前に、礼装姿の森鷗外（北九州森鷗外記念会発行の書「森鷗外と北九州」より）

八頭良一は豊前市の出身。1901年（明治34年）、鷗外と出会い、自身で考案した日本初の国産機械式計算機（自動算盤）を提示、鷗外を喜ばせた。その彼は31歳の若さで1908年（明治41年）死去。鷗外は遺族に「天馬行空」の書を贈って彼を偲び、称えた。

彼等との交友、軍医部長としての仕事はもちろん、着任後その学識が認められて講演、講座などに招かれ、地の人に親しまれるようになった。また、1902年（明治35年）3月の離任まで、アンデルセンの「即興詩人」、クラウゼヴィッツの「戦論」の翻訳など鷗外でなければ出来ない仕事を展開。さらに本業関係では、「小倉市街の水は塩分が多く、防疫上、伝染病の危険がある」として水道給水を提言、診療にも応じた。

作品から伝わる小倉への愛着、魅力

鷗外についての研究、顕彰は戦前、戦時中から行われてきているが、北九州市は1990年（平成2年）、自分史文学賞を創設した。「鷗外が蒔いた文化、文学の種子は着実に育っている」として森鷗外記念のタイトルを添えての措置。

北九州森鷗外記念会理事の轟良子さん（70）は森鷗外記念会発行の「森鷗外と北九州」の中で「禅僧との交流などを通して地方と中央、日本と外国での体験が小倉時代に融合され、鷗外の精神を確立させたのではあるまいか。

―中略―

いかなる境界にありても平気にて、出来る丈の事は決して廃せず、一日は一日丈進み行くやうに心掛く

こうした心境を生んだ小倉への愛着は、鷗外の作品から伝わってくる。小倉時代2年間は、鷗外にとっても小倉にとっても実りが多かった」と彼の功績、魅力を称えている。

シニアスタッフ 村田和夫